



共通必修科目「特別支援教育の実践01」授業風景より

豊かな実りにむけて

新潟大学大学院教育実践学研究所 研究科長 高木幸子

佐渡島を代表する「おけさ柿」となる「平核無」は渋柿の代表品種であり、脱渋後のとろりとした肉質は柿の中でも最上級と評価されています。おけさ柿を佐渡に導入した杉田清氏の記録によると、昭和初年に起こった農村恐慌を乗り越えるために、佐渡島では二十世紀梨の畑を増やす計画を立てたが、当時、杉田氏が担当していた羽茂だけが「おけさ柿」を選んだことが記されています(杉田清、生誕百年記念誌)。現在の特産物としての「おけさ柿」は、その当時の判断や栽培努力が実を結んだ結果と言えます。

大学院生として過ごす2年間、各院生はどのような実りを求めて力を蓄え、自身を育てていく時間を過ごしているでしょう。この時期、自身の取り組む課題が鮮明化された人、後期に行う実践の準備を進めている人、実践内容や結果を基に取組の全体像を整理し始めた人など、それぞれが自身の探究を進めています。

依然として感染症対策が求められる中で、後期の授業が始まりました。教職大学院では、対面・非対面の授業を組み合わせ、学校実習や協議・省察を重視して進めます。実りを実感するには時間がかかる内容もあるでしょうが、その時を迎えられるよう歩み続けたいものです。



教職大学院の授業を紹介します

選択必修

学級経営の理論と実践

担当教員 遠藤英和・雲尾周・渋谷徹・森田隆行

本講義は月に1回程度、水曜日の3・4・5限を通して行っています。シラバスでは1日目は概論、2日目は小学校の学級経営、3日目は中学校の学級経営、4日目は特別支援教育の観点からの学級経営、5日目は総論として学級経営から学年経営への展開（さらには異年齢交流、地域交流）も含む内容としています。授業の到達目標及びテーマとして以下を記しています。「生きる力は教育課程全体で育むものであるが、特に、対人的スキル等については、特別活動において育成を図ることが効果的である。生きる力を育む学級経営の在り方を考究しつつ、学年全体、異年齢交流、地域交流も視野に入れることができるようにする。学級経営の様々な手法を知り、学校現場で実践できるようにする。」

令和3年度は、3日目の一部を新潟市総合教育センターとの連携講座と設定し、同センターを会場として新潟市立学校教員の研修と合同で行いました（5日目も予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大による県の特別警報を受け合同対面形式を取りやめました）。

学級経営は教員養成課程でまとめて学ぶことが少なく、教員となってから実践を進めるなかで学び、試行錯誤しながら身に付けているところが大きい。手段とも目的としながら、学級経営は、教科指導でもあり（例えば、学級経営を手段と

して教科学習の理解度を高め、逆に教科指導を行う中で学級経営の充実を図る、といったこと）、生徒指導でもあり、またカリキュラム上では道徳、特別活動（学級活動、学校行事等も含まれる）、総合的な学習の時間とも関わりが深いものです。第5講「学級集団づくりの実際」、第8講「学級経営と学習指導」など、学級経営の実践を多々積んだ講師からの話にそれが表れています。学級経営そのものが研究会等で取り上げられることも少ないが、附属新潟小、附属新潟中の教員から同校の研究課題等に関わって講じてもらっています。

最終の第15講では模擬授業（学級開き）を行い、学びの成果を活かした報告が多々見られました。他の教員の学級経営を目にする機会はなかなか無いので、本講義は現職教員院生にとっても得難い内容となっています。もちろん、学部卒院生にとっては学級経営に対する不安感を大いに軽減し、モラールを高めていることが期待されます。（文責 雲尾周）



選択

キャリア教育の理論と実践

担当教員 松井賢二・田村和弘

2017年の小中学校の学習指導要領の改訂でようやく小・中・高等学校の3つの校種において揃って「キャリア教育」という用語が使用されました。これを機にキャリア教育の更なる充実が求められています。

中央教育審議会（2011）はキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義しています。児童生徒のキャリア発達（社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程：中央教育審議会、2011）を促進するにはどのような実践が必要で、その実践の背景にはどのような理論があるのか、理論と実践の往還を意識した講義を行っています。実際には研究者教員によるキャリア教育の歴史的な背景、理論の解説、実務家教員や県内の小中高等学校の現職教員の実践紹介、紹介した実践の解説を行います。また、キャリア・カウンセリングに関する講義では小中高等学校の事例から役割（管理職、教諭、養護教諭等）に応じた支援を具体的に考えるなど、現時点や今後のキャリアに対応するよう授業を構成しています。

副次的な効果もあります。職業レディネステスト「第3版」（著者：労働政策研究・研修機構）を実際に体験します。中学生以上を対象としたテストですが、授業の振り返りから、院生自身のキャリアを見つめ直すことに繋がっていることがうかがえます。私も院生時代にキャリア教育を学びましたが、自身のキャリアについて深く考えるようになりました。職業人という視点だけでなく、家庭人、地域社会の一員等としていかに生きるかということを考えました。いかに生きるかということを真剣に考える契機と視点を与えてくれたのが、キャリア教育の授業でした。キャリア教育を学ぶことは、児童生徒のキャリア発達を促進するということが大きな目的となりますが、院生自身のキャリアを見つめることにも繋がります。

クルト・レヴィンは「理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である」と言っています。理論と実践の往還を促進することによって、院生のキャリア教育の実践意欲を高め、また実践の道標となる授業、そして院生自身のキャリア発達を促進する授業を今後も目指して行きたいと思っています。（文責 田村和弘）

引用文献：中央教育審議会2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」

教育フォーラム

素敵な先生方と出会い、対話できたこと素直に嬉しく思います（参加者アンケートより）

にいがた教育フォーラム2021 in August

大会副実行委員長 新潟大学教職大学院 横堀壮昭



令和3年8月7日（土）、「ともに考え、つくろう 新たな教育の“カタチ”～今 創発のとき～」をテーマに「にいがた教育フォーラム2021 in August」を開催いたしました。コロナ禍の状況下であることを考慮し、オンラインでの開催といたしました。九つのワークショップ（下表参照）と六つのラウンドテーブル（テーマ別、少人数での語り合い）を行いました。関係者も含めワークショップ194人、ラウンドテーブル145人、延べ339人の参加がありました。

1. 学校で生かす臨床心理学～不登校・教室に入れない子とその保護者の理解と支援～
2. これからの学校教育と「学びの扉」探し～一連のコロナ対応を通して見えてきた「これからの学校教育のあり方」～
3. スタカリどうしてる？～幼児期から児童期への資質・能力の連続的な育みを目指して～
4. 高等学校における特別支援教育の現状と課題～発達障害がある子供の卒業後の姿から～
5. 1人1台端末時代の家庭科授業はどう変わる？どう変える？
6. コロナ&GIGAで国語の授業は変わるか？～今、変わるもの、変わらないもの～
7. 新しい道徳授業のカタチ～ICTで授業を変える～
8. GIGAスクール時代の新しい授業づくり・学校づくり
9. コロナ後の体育授業における質の高い学習課題について考える



参加者アンケートには、「これから自分が意識していくこと、していかなければならないことなどを考えるきっかけやヒントをいただきました。」「大変、素敵な学びの場となりました。Zoomでもしっかりと話し合った価値を共有することができたと思います。」「みなさん本当に温かい人ばかりでさまざまな意見を交わすことができ充実した時間となりました。」など素敵なコメントをたくさんいただきました。

コロナ禍のこの状況になり、2年近くが経ちました。教育の“カタチ”も多様化してきています。本フォーラムをきっかけに、新たな教育の“カタチ”を皆さんと一緒に追究し続けていきたいと考えています。

ワークショップに参加して

新潟市教育委員会 学校支援課
指導主事 齋藤文一



昨年度、ZOOMでの教育フォーラムに参加し、アットホームな雰囲気の下で県内外の方々と情報交換ができ、大変有意義な時間を過ごすことができたため、今年度も参加しました。参加したワークショップ「高等学校における特別支援教育の現状と課題」では、中学校特別支援学級における進路指導の中で、多くの保護者が「高校と特別支援学校の間の学校があったら」という思いをもたれていることや、高等学校における通級指導では、特別支援教育の広がりが見られている中で、更なる職員の意識向上や、校内連携システムの改善と構築を目指した取組がなされていることを知り、大変新鮮で有益な情報を得ることができました。

また、基調講演では、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課加藤典子特別支援教育調査官より、切れ目ない支援体制の構築に向けて、高等学校における通級指導教室の在り方やこれからの取組等をご教示いただき、新潟市の特別支援教育の取組を後押ししてくださっていると思える内容を拝聴することができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。今回も貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

ラウンドテーブルに参加して

新潟大学教職大学院
院生 菊池沙羅



ラウンドテーブルでは「授業づくり」の分科会に参加し、話題提供を行いました。私自身が研究課題としている“実践的態度の育成”について発表しつつ、同じラウンドテーブルに参加いただいた方々と、学びを実生活に生かせるように授業を作るにはどうしたら良いか、ということについてたくさんお話ししました。小学校で低学年を担当している先生や高校の先生とお話できて、普段とは違った視点から考えることができました。また、自分自身の研究だけではなく、これから現場に出る上での学びにもなりました。

普段の仲間との発表や相談でも発見はあるものの、フォーラムなどの機会がないとなかなか会えない方との交流は新たに学ぶことが多いと感じました。専門教科も違った先生方が集ったので、それぞれの教科での工夫を聞くことができ、参考にできる部分は取り入れていきたいと思っています。とても有意義な時間でした。

教育・研究活動紹介



教員 神村 栄一

臨床心理学

臨床心理学の研究者の場合、自ら実践の経験を持つことにアドバンテージがある。筆者なりに、実践は大切にしてきた。これまでいただいたご相談で最も多いのは「登校が困難になった」である。臨床実践の蓄積を、基礎研究で得たデータや世界中の膨大な資料と照らし合わせ考察することが、研究活動となる。不登校に関してだと、「今は元気な中にいる近い将来連続欠席になる子」を高い精度で予測できないかと考えている。予測には、①過去に（小1以降）欠席が多かった時期がある、②身内（家族）に不登校や「見かけ健康だが就労や就学が困難」な方がいる、③好き嫌いが激しくいったん苦手になると徹底して避ける特性がある、④睡眠を中心とした生活のリズムが乱れている、の4つが重要と考えている。この条件について、良い悪いと価値判断することに意味は無い。そもそも登校と不登校を、正邪で語るのはナンセンスである。文部科学省はすでにこれを問題行動と見

ていないし、医学的診断名でもない。ただ、その子の将来に一定のリスクとなるし、より深刻な病理のサインでもある可能性もあるから、放置しておくわけにはいかない、という位置付けである。いずれにしても、AはどれだけBを予測するのか、その予測性に影響するCには何があるか、を見極める。それが科学である。医療や健康の分野では科学ベースが当たり前だが、わが国の学校教育はそうでもない。教育相談などでは未だに、文学的人間学的考察で理解し対応すべしという、時代錯誤にある。成人のうつ病や不安症、強迫症、行動嗜癖の問題を抱える方にも多く関わってきたが、先に挙げた、①経歴、②周囲、③衝動制御の特性、④生活習慣、などがリスクであり、それらの負の影響が減弱すれば、改善が得られやすくなる点は全く同じである。科学者（の端くれ）でもある実践家。複雑な現象をシンプルにとらえ効率的に関わるためのスタンスはこれに尽きる。

活躍する修了生



学び続ける教師を目指します

新潟大学教職大学院 令和2年度修了生 渡部 久美子（新潟市立東特別支援学校）

教職大学院に入学するまでの18年間、新潟県内の小学校と特別支援学校に勤務してきました。その中で、特別支援教育に携わり、子供たちの主体的な取組を支援したいと考え、日々の教育活動に自分なりに精一杯取り組んできました。教職経験を重ね、目の前のことに追われる毎日の中で、これまでの自分の取組について一度立ち止まって振り返る機会をもちたいという思いを抱くようになりました。同時に、自分自身の視野を広げ、学んだことを子供たちに還元していきたいと強く思うようになり、入学を決意しました。

教職大学院は、理論と実践の往還を図り、学びを深めていくことができるカリキュラムが組まれています。そして、年齢、教職経験、校種等が異なる院生が共に学び合う環境があります。授業では、ディスカッションを通して、様々な立場の人の見方や考え方に触れることができました。このことは、当たり前のこととして考えてきたことや取り組んできたことを自分自身に問い直すき

かけとなりました。また、自分の勤務校の課題を解決するための実習とその省察を行う課題研究では、大学院生としてこれまでと異なる立場で教育活動に携わりました。このことは、目の前のことだけではなく、学校全体、更には社会全体を俯瞰して見ることで広く課題を捉えることができる貴重な経験となりました。そして、課題解決には、同僚性や協働性が欠かせないことに改めて気付かされました。

現在、教職大学院での2年間の学びや気付きを大切にしながら、勤務校で授業をしたり、校内研修を進めたりしています。また、教職大学院の先生方から、課題研究で取り組んだ実践を論文にまとめたり、教職大学院で授業したりする機会をいただき取り組んでいます。教職大学院での学びや恵まれたご縁に感謝し、これからも自分自身学び続け、子供たちの学びの充実を図るの一助となるよう努力していきます。

院生同士の会話から。A「iPadの常用で子どもの書く字が綺麗でなくなってきた。使わせたくない」、B「いや手描き文字を不要と捉えるか、逆に練習で補うかでしょ？」 皆様はどう思われますか。ご意見、ご感想をお待ちしています。

今年度もレイアウト・デザインを委託先の（株）Shitamichi HDに勤務する本学大学院修了生 川口かおりさんがご担当くださいました。（文責 森田隆行）

新潟大学教職大学院 News Letter「協創」 第11号 2021.12.1 発行 編集・発行 新潟大学大学院教育実践学研究所(教職大学院)広報委員会
〒950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐二の町8050 問い合わせ先・kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
ホームページ URL: <https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/> ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。



<https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>

